

# 小林力三物語

KOBAYASHI RIKIZOU

激動の明治・大正・昭和史を  
新潟港に生きた小林力三物語



◀ 初代の小林力三、  
最晩年の写真



▲ 大連汽船の河北丸、4,900トン、大連—新潟に就航

## 〔創業前史〕 北前船の終えんと 近代海運の幕開け

明治維新は自由と競争経済の幕開けになった。新政府が特権的な豪商による株仲間制度を禁じたことで、新潟港の海運業界には海産物商や米穀商、材木商などの新顔が次々と参入した。幕藩体制下の北前船交易で繁栄してきた津軽屋、当銀屋など老舗の廻船問屋の多くが衰退し、代わって荒川太二、斎藤喜十郎、鍵富三作、藤田文二、田代三吉らの新興勢力が台頭したのだ。

さらに明治10年代、西南戦争を機に岩崎弥太郎の三菱商會が国内航路の覇権を握ったことに反発して、益田孝の三井物産と第一国立銀行の渋沢栄一が日本海を舞台に海運戦争を仕掛けた。これに酒田や伏木の高運業者が巻き込まれた。なかでも大阪・堂島への米積み出し量が多い新潟港は激しい主戦場になった。三菱派の旗頭は藤田文二、三井派の頭目は鍵富三作。互いに譲らぬ経済戦争が1885(明治18)年まで延々と続いたのである。

小林音蔵(後の初代力三)が海運業に身を投じた1884(明治17)年は、その戦いがピークにあったころだ。大小の廻船問屋が軒を並べる信濃川西側の新潟町芳町(よしちょう)に廻船問屋「綱伝」があった。ここに16歳になったばかりの音蔵が見習い奉公にはいった。綱伝は和船を所有して直江津、柏崎、佐渡夷の近郊地を、ときには函館や江差などの港々まで手広く取引した。

主人の綱谷伝五郎から廻船業のいろはを叩き込まれた音蔵だが、5年間の奉公は給金も安く極貧の暮らしだったと回想する。それでも商売のコツを覚えてからは、主人の特別な許しで梨など果物類を北海道に移送する

手間賃稼ぎで生活費の足しにする才覚をみせたりした。

三井・三菱戦争で活躍した藤田文二は幕末からの新進の米穀商だ。苦勞の末に米取引で財を築き、傾いた老舗当銀屋の再建に手を貸し廻船業にも進出した。近代簿記で帳簿付けした新潟商人の第一号という。最初は帆船だけだったが、回漕部門を強化しようと1891(明治24)年春、鳥羽鉄工所(三重県)に汽船建造を依頼した。だがその運航を差配できる人材が藤田商店にいなかった。そこで藤田回漕店の番頭が音蔵に白羽の矢を立てた。鳥羽港で新鋭船を受領し、新潟港まで無事に回航させるのが音蔵の初仕事になった。藤田文二は音蔵に汽船事務長の肩書を与えた。初めは乗船指揮で函館、江差と新潟を往復したが、過勞で体を壊して後は陸上勤務での取引差配に専念した。ほどなく回漕店を統括する支配人格にのし上がっていった。

転機は、文二の跡取り息子簡吉が慶応義塾を卒業し取締役となって入社したころにやってきた。簡吉とは一歳違い。音蔵には勉学の志を断って綱伝に奉公した16歳の時の無念が心の底にずっとあった。自身も愛読した「学問のすすめ」の著者福沢諭吉から直に薫陶を受けて新潟に戻ったという若主人簡吉の晴れ姿がまぶしくて仕方がなかったのだろう。音蔵はこのとき力三に改名した。そして簡吉の度重なる懇請を振り切って退職願をだした。1897(明治30)年11月のこと。その後、簡吉は大正期には新潟米穀取引所理事長や新潟商議所副会頭の重職を務め、新潟財界の重鎮になった人物である。

## 頼みは己の才覚ひとつ、 海運業の荒波にこぎ出す

音蔵改め小林力三は、このとき独立開業の道を模索し